

P2-042

子どもの成長発達に対する訪問看護師の支援に関する文献検討

西村 実希子、西田 志穂、杉本 晃子

共立女子大学 看護学部

【目的】

文献検討を通して、子どもの成長発達に対する訪問看護師の支援を明らかにする。

【方法】

医学中央雑誌 Web を使用して、「小児」「子ども」「訪問看護」をキーワードとして 2010～2019 年の看護文献（原著論文）を検索し 183 件を得た。そのうち、目的と照合して「訪問看護師が成長発達を意識している内容」「ケアの実際」について記載がある 28 文献を対象とした。文献は著作権に配慮して取り扱い、研究の全過程において共同研究者とともに検討し、妥当性を維持した。

【結果】

訪問看護師は、遊びやレスパイトで長時間一緒に過ごすことで、療育や遊びなどの必要な経験を判断し、子どもの成長発達の可能性を捉えていた。また、離乳食を進める、トイレトレーニングなど基本的な日常生活支援を通して、呼吸を安定させるケアや嚥下訓練など、その子に必要な支援を加えていた。また、家族のいない場所でも子どもが過ごせるようになるために、意思表示の方法を試行錯誤し、様々な人とコミュニケーションが取れるように支援していた。さらに、将来の療育施設の利用や就学など、社会性の発達を見据えて子どものコミュニケーション能力の向上を図っていた。そして、言語聴覚士との連携や教育機関に働きかけるなど、発達に応じた地域の専門職種を支援に巻き込むきっかけを作っていた。家族に対しては、子どもの変化やできることを母親が理解し、喜びに感じているかを把握し、子どもの成長の可能性に対して、家族が客観的な目を向けられるように支援していた。そして、看護師は、家族が療育上困ったときには相談を受けたり、成長発達に合わせた医療的ケアできるように助言をしたりして、子どもの成長を家族と共に見守る存在となっていた。また、ステーション主催のレクリエーションへの参加を促して外出へのきっかけを作る、どうすれば子どもを連れて外出できるかを家族と共に考えて練習を行うなど、子どもの生活場所が拡大するよう支援していた。特に、テーマパークなどへの遠出には看護師同行の条件で医師が許可する場合もあるため、看護師が存在することそのものが子どもの生活を広げていた。

【考察】

看護師は、子どもは成長発達して社会性を広げる存在であることを前提とし、子どもの状況から具体的にイメージしていた。子どもに直接働きかけるだけでなく、家族の養育を支援し、社会資源や看護師自身の存在も活用して、子どもの成長発達を支援していた。

P2-043

在宅重症心身障害児家族のレスパイトケア利用に関する意思決定支援

西垣 佳織

聖路加国際大学大学院 看護学研究科

【目的】在宅で生活する重症心身障害児（以下重症児）の家族には、特有の身体・精神的な負担が存在する。これらの家族が在宅療養を無理なく継続するための一方策として、効果的なレスパイトケア利用が存在する。しかし相談支援事業の不足等により、効果的なレスパイトケア利用を家族が意思決定する際には、困難が存在する。

そこで本研究では、重症児家族のレスパイトケア利用の意思決定支援ツールを作成した。

【方法】オタワ個人意思決定ガイドを参考に、意思決定支援ツールの構成を検討した。また適切な情報提供が必要な項目では、レスパイトケアに関する先行研究の文献検討と行政公開資料等によって、内容の質を担保した。

【結果】検討の結果、意思決定支援ツールは、「1. 重症児の家族の、レスパイトケアに対する意向および利用状況の認知を促進する項目」、「2. 意思決定に当たり必要な項目の明確化」、「3. 意思決定の明示」で構成された。1 の項目は、レスパイトケアの定義、具体的な社会資源としてのレスパイトケアの説明、先行研究で報告されているメリットとデメリットで構成された。具体的なメリットでは、重症児の社会性の上昇、家族の精神状態の改善等を取り入れた。デメリットでは重症児の身体的負担、レスパイトケアが利用しにくい状況等を取り入れた。2 の項目は、オタワ意思決定支援ガイドをもとに、知識、価値観、サポートの側面から意思決定を支援する内容で構成された。3 の項目は、レスパイトケア活用について、どのような選択をするかをワークシートの形で対象者が意思決定可能な構成となった。

【結論】意思決定支援には、対象者への適切な情報提供（知識の付与）が重要である。本研究で作成した意思決定支援ツールの効果について、今後検証していく必要がある。

本研究は文部科学省科研費 若手 B 重症心身障がい児のレスパイトケア活用推進を目指すツール作成および効果検証 17K17489 の助成を受けて行いました。